

万葉における「美女」と「容艶」と

——その美の系譜について——

梶 井 重 雄

目 次

- 序
I 「美女」と「容艶」
II 「うるはし」と「うつくし」
III 「くはし」
IV 「にのほ」と「さにづらふ」
V 「にほひ」
むすび

序

「美女」は、「美人」「美貌」「美麗」などと共に、萬葉集の歌の題詞や左注に見える言葉であって、恐らく、当時最も隆盛を極めた中国文化の影響を大いに受け、若々しいエネルギーを凝集して誕生した、国際的な歌集である萬葉集に於ては、これらの熟語も或いは呉音で発音し、その語感のひびきにも、我々が今日感ずるよりはるかに斬新なものがあつたであらう。ここに「美人」とあるのも、「見_三姫島松原美人_一」(卷三、四三四) (題詞) の場合は女性であるが、「此娘子不_レ聴_二高姓美人之所_一詠。」(此の娘子高

き姓の美人の詠ふるを聴さずして) (卷十六、三八二) や「為下

向_レ京之時、見_二貴人_一、及相_三美人_一、飲宴之日上」(卷十八、四二二) (題詞)

は共に男性である。「美麗」は、蒼鷹(羽毛が着色を帯びた鷹)をほめて「形容美麗」(卷十七、四〇二) と言つたのである。

「美女」と「容艶」については本論で詳細することにして、「美貌」について述べよう。「住吉」の小集樂に出でて現にも己妻すらを鏡と見つも」(卷十六、三八〇) の左注に、

右は傳へて云はく、昔者鄙人あり。姓名詳らかならず。時に郷里の男女の、衆集ひて野遊しき。この會集の中に鄙人の夫婦あり。其の婦容姿端正しきこと衆諸に秀れたり。(其婦容姿端正、秀_二於衆諸_一) すなはち彼の鄙人の意に、彌妻を愛しふる情増りて、(彌増_二愛_レ妻之情_一) この歌を作り、美貌を賛嘆したりきといへり。(賛_二嘆美貌_一也)

とあって、鄙人は田舎者のことであるが、此の左注は、「容姿端正」と「愛_レ妻之情」とが関連語として扱われている。いよいよ妻を愛する情が深められて来たのは、容姿が衆にすぐれて美麗なる故であるというのである。萬葉に於て、私が此所に論ぜんとする「うるはし」と「うつくし」との関連が、くしくもしるされて

いて面白いと思う。

I 「美女」と「容艶」

「美女」の用例は左の通りである。

在三館門一見江南美女一作歌一首

見和田世婆 牟加都乎能倍乃 波奈爾保比豆里氏多豆流波

波之伎多我都麻 卷二十
四三九七

右三首、二月十七日、兵部少輔大伴家持作之

館門に在りて江南の美女を見て作る歌一首

見渡せば向つ峰の上の花にほひ照りて立てるは愛しき誰が妻

右の三首は、二月十七日に、兵部少輔大伴家持作れり

此の一首は「美女」を日本語を用いて日本式に表現した、家持のとらえた女人像であるということが出来よう。一首の構成は「花にほひ照りて立てる」女人像と「愛しき誰が妻」とは同一人であるが、その表現には「美」と「愛」との意識の相違がはっきりと出ていると思う。「美」ははずれかといえれば観照の対象であり、「愛」は、感情に訴える内的な作用である。家持が題詞に「美女」といった、その言葉の意味は「花にほひ照りて立てる」女人の立像の美しさであったに相違ないのである。そして、その「にほひ」を中心とした私の処論は、Vの「にほひ」にゆずらなければならぬ。

「容艶」の用例は左の通りである。

詠三上総末珠名娘子一首并短歌

水長鳥 安房爾継有 梓弓 末乃珠名者 胸別之 廣吾妹

腰細之 須軽娘子之 其姿之 端正爾 如花 咲而立者 玉

梓乃 道往人者 己行 道者不去而 不召爾 門至奴 指並

隣之君者 預 己妻離而 不乞爾 鑑左倍奉 人皆乃 如

是迷有者 容艶 縁而曾妹者 多波礼豆有家留 卷九
一七三八

上総の周准の珠名娘子を詠む一首 短歌を併

しなが鳥 安房に継ぎたる 梓弓 周准の珠名は 胸別

の ゆたけき吾妹 腰細の すがる娘子の その姿の 端々

しきに 花の如 咲みて立てれば 玉梓の 道行く人は 己

が行く 道は行かずに 召ばなくに 門に至りぬ さし並ぶ

隣の君は あらかじめ 己妻離れて 乞はなくに 鑑さへ

奉る 人皆の 斯く迷へれば 容艶きに よりてそ妹は た

はれてありける

右の長歌もまた美女を詠んだものである。周准の珠名という娘子は美女であって、男性はその妻と別れてまで、その美女に迷っているが、理由は「容艶きに」よってであるという。「容艶」の二字を「かほよきに」と読むことについては、後ほど述べることにして、此の歌であげた美女の條件を列挙すると左のようになる。

イ、胸別のゆたけき吾妹 胸幅の広く豊かな妹

ロ、腰細のすがる娘子 そとめすがる蜂（ジガバチ）のように腰の細くしまった娘子

ハ、その姿の端正しきに その容姿（かほすがた）がととのって美しい花のように美しく微笑して立っている

ニ、花の如咲みて立てれば （注）イ、は胸廣が美人の条件であったことを示している。ロ、蜂のようにウエストの締った美しさを云うので、これは現代も同じ。

ハ、顔の輝くような美しさで、これも現在に同じ。ニ、は花のような微笑というので、微笑の美しさは、萬葉では様々なニュアンスを以て迫って来る。そこで「きらきらし」であるが、新撰字鏡

に、美女の合字である媵の文字や妍の文字を「支良支良志」と読ませているのは参考になる。

端正 岐良支良之 (日本靈異記の訓注)

媵媵妍 支良々々志 (新撰字鏡) 「設文」に媵、色好也とあり、みめよい、うつくしいの意(大漢和辞典)

鮮 キラキラシ (類聚名義抄)

端正はまた「容姿端正」(古事記中巻)ともあって「うるはし」とも読める文字であるが、「うるはし」については後程詳述する。

また、顔と美女との関連については「にのほ」「さにつらふ」で詳しく述べる。

そこで「容艶」の二字であるが、此の二字を熟語にした用例は外になく在来の諸注釈書はとりどりに読んでいる。

カホニホヒ 全註釈

ウチシナヒ 略解・宣長・新考・全釈

カホスカタ 紀州本萬葉集

トリヨソヒ 中山殿水

カホヨキニ 西本願寺本萬葉集・私注・注釈・日本古典文学大系

私もまた私注(土屋文明)注釈(沢瀉久孝)などと同様に「カホヨキニ」とよむのであるが、二氏の注釈(註)以外に、左の理由によるのである。

類聚名義抄によると、左の漢字は、ともに「ウルハシ」と「カホヨシ」両方によましているのので、「ウルハシ」と「カホヨシ」の意味内容が接近していたことを示している。

美 カホヨシ 麗 カホヨシ

婢 カホヨシ 妍 カホヨシ

姝 カホヨシ 姁 カホヨシ

美・麗は日本よみにすれば「うるはし」「くはし」とよめる字

で、夫々については後程詳述するが、他の女篇の文字は、漢字では女性の美しさを表現している文字である。此の長歌で女性の美しさを胸・腰・容姿・微笑などと列挙して、しめくくりとして「容艶」(かほよきに)で要約したのは、なかなかの文才であると思う。

更に「容艶」の「艶」の字について云えば萬葉集講義九四(山田孝雄著)に

「艶」は美色なり。左傳桓公元年注に「美色曰艶」とあり、国語にては「にほひ」といふべし。

萬葉集に

見渡者春日之野辺爾霞立開艶者桜花鴨卷十

見渡せば春日の野辺に霞立ち咲きにほへるは桜花かも

馬並而高山部乎白妙丹令艶色有者梅花鴨卷十

馬並めて多賀の山辺を白妙しろたへににほはしたるは梅の花かも

とあるのが参考となる。

「美女」と「容艶」との関連は、おのずから、萬葉における、「うるはし」「くはし」「にのほ」「さにつらふ」「にほひ」の美を究明することになる。

II 「うるはし」

「うるはし」については、先に名義抄を引いて「かほよし」と同じ訓をほどこした「美」「麗」「妍」「姝」等の文字をあげたが、「うるはし」の例のすべてをあげると百を越え、その中には、光や色に関する「光」「彩」「艶」「華」や「文」「雅」

「端」「旦」などと、多彩な美しさが含まれている。

今、萬葉の辞典によって「うるはし」の語を見ると

佐佐木信綱（萬葉集事典）

うるはし（形）（形） 廻美しい。愛らしい。美麗。

折口信夫（萬葉集辭典）

うるはし「美・麗」うつくしい。立派。綺麗でつやっぱい

（ア）。かあゆく思う。なかがよい（イ）。潤ふの形容詞化。

ここで「うるはし」には美麗の外に「愛らしい」の意が両者によって指摘されていることとなる。

さて萬葉の仮名がきの例をあげれば

Aグループ

男性から女性に贈ったもの 卷十五、三七二九・三七五五・三七六六

Bグループ

男性から男性に贈ったもの 卷十八、四〇八八・卷二十、四四五一・卷十七、三九六九・卷十八、三九七四・卷二十、四五〇四

Cグループ

大伴旅人作、夢中問答 卷五、八二一

Aグループは三首とも、中臣宅守から茅上娘子に贈ったものであり、Bグループは大伴家持、大伴池主等の役人同志のものである。そこで各グループから一例づつを示すと、

宇流波之等 安我毛布伊毛乎 山川乎 奈可爾徹奈里呂 夜

須家久毛奈之 卷十五、三七五五

うるはしと吾が思ふ妹を山川を中に隔りて安けくもなし（Aグループ）

グループ）

宇流波之美 安我毛布伎美波 奈弓之故我 波奈爾奈蘇倍呂

美礼杼安可奴香母 卷二十一、四四五一

うるはしみ吾が思ふ君は石竹花が花に比へて見れど飽かぬか

も（Bグループ）

許等等波奴 樹爾波安里等母 宇流波之吉 伎美我手奈礼能

許等爾之安流倍志 卷五、八二一

言問はぬ樹にはありともうるはしき君が手馴れの琴にしある

べし（Cグループ）

認識は比較によると云うが、更に「古事記」の仮名がきの例をあげよう。

a、夜麻登波 久爾能麻本呂婆 多多那豆久 阿袁加岐 夜麻碁

母禮流 夜麻登志宇流波斯 （中巻）

倭は 国のまほろば たたなづく 青垣 山隠れる 倭しう （古事記景行天皇 倭建命の薨去の条）

るはし、古事記景行天皇 倭建命の薨去の条

b、佐佐婆爾 宇都夜阿良禮能 多志陀志爾 韋泥弓牟能知波

比登波加由登母 宇流波斯登佐泥斯佐泥弓婆 加理許母能 （下巻）

美陀禮婆美陀禮 佐泥斯佐泥弓婆

笹葉に 打つや霰の たしだしに 率寝てむ後は 人は離ゆ

とも うるはしと さ寝しさ寝てば 刈薦の乱れば乱れ さ （古事記允恭天皇 輕太子と衣通王の条）

寝しさ寝てば （古事記允恭天皇 輕太子と衣通王の条）

c、美知能斯理 古波陀袁登賣波 阿良蘇波受 泥斯久袁斯叙母

宇流波志美意母布 （中巻）

道の後 古波陀嬢子は 争はず 寝しくをしぞも うるはし （古事記、應神天皇 髮長比売の条）

み思ふ （古事記、應神天皇 髮長比売の条）

a、は、景行天皇の巻の倭建命の有名な国思ひ歌である。b、

は允恭天皇の巻の木梨之輕太子が、その同腹の妹の輕大郎女

（衣通王）と不倫の結婚をした際の歌であり、c、の、古波陀

嬢子は、應神天皇から太子大雀命が賜った髮長比賣のことで、

「道の後 古波陀嬢子を 迦微能碁登（「神のごと」か「雷の如」

か)聞えしかども 相枕まく」ともよんでいる。

そこで、日本古典文学大系本(以下略して大系本という)の萬葉集巻一補注(四三八 愛しき)を参照しつつ解釈すると、

aは「大和しうるはし」と、大和の風光が壯麗であるの意と見るべく、b、軽太子の「うるはしとさ寝しさ寝てば」は、中臣宅守の「うるはしと我が思ふ妹を思ひつつ」の歌とともに、軽太子も中臣宅守も「ウルハシと歌った衣通姫、茅上娘子に対する恋愛によって流罪の刑罰に処せられるに至った人であり」、c、応神天皇から太子大雀命(仁徳天皇)が賜わった髪長比賣も「神の如く聞え」ていた嬢子である。「罪となることを知りつつ引かれて行った男たちは、単に相手を可愛いと思ったというよりも一層深刻に相手の美にうたれ、相手を立派だとさえ感じていたのではなかるうか」大雀命の場合など「明らかに相手を畏れていたわけである。」

そこで、萬葉集のAグループに帰って考えて見よう。宅守と娘子との関係については、巻十五の目録にある「中臣朝臣宅守の、蔵部の女孀狭野茅上娘子を娶きし時に、勅して流罪に断じて、越前国に配しき。」とあるのが唯一の手がかりである。女孀は采女と並んで、天皇に奉仕し、許しなくして之を妻とすることは禁ぜられていたと思われ、宅守は、女孀を妻としたことよって「勅して流罪に断ぜら」れたのであろう。「うるはしと吾が思ふ妹」は、恐ろしい程の艶麗な美しさにひかれて、いよいよ麗わしく思う妹というのが、その意味内容であろう。その妹を、配所の越前の国と奈良の都と山川を中に隔てて心安まることもないと詠嘆しているのである。

次はBグループであるが、それらを宴の歌、書翰の歌、作者、

贈主等に分けると次の様になる。

- (イ) 宴の歌。大伴家持作。贈主 秦伊美吉石竹卷四〇八八
- (ロ) 宴の歌。大伴家持作。贈主 橘 奈良麿卷四四五一
- (ハ) 書翰の歌。大伴家持作。贈主 大伴 池主卷三九六九
- (ニ) 書翰の歌。大伴池主作。贈主 大伴 家持卷三九七四
- (ホ) 宴の歌。中臣清麿作。贈主 客人(家持を) 卷二〇四

これらの歌は「役人同士で、文人趣味をもって、相手を儀礼的に賞揚する場合」に用いられ「相手を、御立派なと形容している」言葉が「うるはしみ吾が思ふ君」であるとしても、その「君」を「石竹子の花」に見たてるということには、それ相当の背景がなければならぬと思う。(イ)の歌の題詞に「主人、百合の花縵はなむら三枚を造り、豆器まめがらに畳かね置きて、賓客に捧げ贈る」とあって、この歌は家持作であって、家持が秦伊美吉石竹に送った歌であるが、家持がつけた花縵は石竹から贈られたものである。家持の此の折の歌に「あぶら火の光に見ゆるわが縵むらさ百合の花の笑あはまはしきかも」卷四〇八六ともあり、夜に入って、いよいよ花やいだ宴会のさまが想像されることである。花縵の用例は他に一か所あり(卷四一五三) 三月三日の曲水まがらみの際の家持の館の宴会の席上家持のよんだものである。「嬢子らの挿頭かざしのためと遊士あそびの縵むらのため」と卷八一四二九とある「みやび」(宮び)が奈良の平城京を中心に咲く花の薫におうごとく花咲き、その都会的・文化的的「みやび」への執心が、「ひな」の越中であって「みやび」を再現し、宴を重ね、風雅を競いあったのであった。「うるはしみ吾が思ふ君」は、外そとに花縵を頂いた絢爛たる君であり、内うちに文才を競いあう風雅の君でなければならなかったのである。

cグループの一首は、大伴旅人のもので、題詞に「梧桐の日本

琴一面」とあり、娘子をとらになった琴が、琴の音を解する「みやびを」の君の膝の上に枕したいと歌った、その答歌が此の一首で、「うるはしき君」は風雅を解する立派な君となる。此の歌、旅人が、琴を藤原房前にたてまつった折のフィクションで、中国の「文選琴賦」や「遊仙窟」から、その想を学んでいる。

「うつくし」

さて、「うつくし」は「うるはし」と並んで萬葉学者の間に、常に問題をかもし出している言葉であるが、先ず、「うつくし」の意味を考え、次にその仮名がきの例を調べ、最後に「愛」の文字を「うつくし」とよむか「うるはし」とよむか、その意味はどうなるかの難問に、私は私なりの考えを述べようと思う。

さて、萬葉の辞典によって「うつくし」の語を見ると
佐佐木信綱（萬葉集事典）

うつくし（形）廻かはいい。愛らしい。可愛らしい。「愛」の字をウルハシとも読む。

折口信夫（萬葉集辭典）

うつくし「愛」かあゆい。いづくしの音転。愛著の心持ちを表す。

両者はともに「うつくし」を愛の意味に解し、美の意味をしるしてはいない。

では、萬葉の仮名がきの例をあげよう。

- A、母（卷二十）（四三九二）（1）と、妻子（卷五）（八〇〇）（2）を対象としたもの
B、少女（卷十四）（三四九六）（1）と、妻（卷二十四）（四四二四）（2）を対象としたもの
C、夫（卷二十三）（四四二二）（1）（卷二十三）（四四二八）（2）を対象としたもの
その用例を示すと、

天地のいづれの神を祈らばか愛し母、（有都久之波々）にまた言問はむ（Aの1）

父母を見れば尊し 妻子見れば めぐし愛し―（妻子美礼婆

米具斯宇都久志―）（Aの2）

橘の古婆の放髪が思ふなむ心愛し（古婆乃波奈里我於毛布

奈牟己許呂宇都久思）いで吾は行かな（Bの1）

大君の命畏み愛しけ真子が手離り（宇都久之氣麻古我弓波

奈利）島傳ひ行く（Bの2）

わが背なを（和我世奈乎）筑紫へ遣りて愛しみ（宇都久之

美）帯は解かなあやにかも寝も（Cの1）（Cの2は1の類歌）

Aの1は防人、大伴部麻與佐の作で、自分が今、防人となって

出征したならば、再び慈母に会うことがあるかというので、

「有都久之波々」は肉親の情愛で結ばれた母で、母は「美」の対

象ではなく「愛」の対象である。Aの2は、山上憶良の作で、妻

子を見れば「米具斯宇都久志」の「めぐし」は「見る目苦しい。

不愍である。愛すべくいとほしい。」（萬葉集事典）で「うつく

し」の同意語である。「めぐしうつくし」は同意語の重複によ

って意味を強めたので、これ又美麗の意味ではない。

Bの1は東歌である「橘」「古婆」共に地名で、「放髪」（波

奈里）は振分髪の少女である。「古婆の少女が私を慕っているで

あろう、その心が可愛い。さあ、出かけよう。」の意となる。

ここでも、「心が美しい」の意味ではない。Bの2は防人の歌

で、大伴部少歳の作である。「真子」（麻古）のマは接頭語、コ

は妻の意で、「宇都久之氣」は愛しきの東語である。真子は妻の

愛称の如く用いられ「真子が手離り島伝ひ行く」は愛の切なるを

具象化した句である。Cの1は防人の妻、服部皆女の作である。

夫を防人として遠い筑紫へやってしまったいとしさに帯は解かずに心乱れて寝ることであろうか、の意であり、「うつくしみ」は「美しみ」ではない。以上の用例は萬葉における仮名がきのすべてであるが、『記』『紀』の歌謡の中、『日本書紀』に左の用例がある。

1、本毎に花は咲けども何とかも愛し妹が（于都俱之伊母我）また咲き出来ぬ（孝徳紀 大化五年三月）

2、愛しき（于都俱之枳）吾が若き子を置きてか行かむ（齊明紀 四年十月）

1は、妃、蘇我造媛の死を傷む皇太子の心になって、野中川原史満が奉った挽歌で、「愛し妹」（于都俱之伊母）は、皇太子がいとしく思う妹である。萬葉の防人の歌にある「時々花は咲けども何すれぞ母とふ花（波々登布波奈）の咲き出来ずむ」四三三三と同様に花は比喻である。「花」と妹との関係は「妹という花」が「また咲き出来ぬ」（再び咲いて来ないであろう）となる。2は天皇が、紀温湯に幸じた際に、年八才で薨せ給うた皇孫建王を憶いでて作られたもので、「吾が若き子（阿餓倭柯枳古）」は、皇孫建王である。一首は「かわいい私の幼い子を後に残して行くことであろうか」の意となって「于都俱之枳」は愛の美味で、美の意味ではない。

さて、日本古典文学大系本は「うつくし」が情愛の意味をもつことについて立論の傍証として類聚名義抄に「恵」「憐」「親」「寵」「仁」「恩」等を「うつくし」とよませていることをあげた。そこまではよいが、しかし、大系本は「愛」は「うつくし」とも「うるはし」ともよまれるとし、いわば、「愛」に「美」の意味が存することを是認したこととなつてしまつた為、「愛」に「うるはし」の訓をもほどこしてしまつたのである。私は諸橋轍

次の大漢和辞典によって詳細に調べたが、「愛」の文字には、中国の辞書にも「美」の意味の皆無であることを明かにした。今、此の二書を並置してみると左の様（表1）になる。

表 1

類聚名義抄		大漢和辞典	
恵	ウツクシフ	正説 韻文	愛、恵也（いつくしむ）
憐	ウツクシフ	字彙	愛、憐也（あはれむ）
親	ウツクシフ	正韻	愛、親也（したしむ）
寵	ウツクシフ	字彙	愛、寵也（ひいきにする。きにいろ）
仁	ウツクシフ	広雅、釈詁四	愛、仁也（なさけをかける）
恩	ウツクシム	字彙	愛、恩也（同 右）
楽	ウツクシフ	字彙	愛、好楽也（めでる、このむ）

右の表によると、「愛」の意味をもった、以上の漢字が「ウツクシフ」「ウツクシム」とよまれる文字であるということになる。さらに「愛」の文字をウツクシと訓じたものはないかとすると、澤瀉久孝氏の「萬葉集注釋」に『遊仙窟』には（醍醐寺本にも真福寺本にも）「愛」にウツクシの訓があつてウツクシと訓まれた時代のあつた事は明らかである』とあつて、その証となる。

そこで萬葉集中、十八か所の「愛」と一か所の「恵」とを全部「うつくし」の訓でよむことができなからうか。実際の歌について、その訓と意とがどうなるかを考えてみよう。左表（表2）に『日本古典文学大系』『萬葉集私注』『萬葉集注釋』を対照として、訓と意を記した。

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
(11) 2 3 5 5	(10) 2 3 4 3	(6) 1 0 6 7	(6) 9 0 4	(4) 6 8 7	(4) 6 6 1	(4) 5 6 6	(4) 5 4 3	(3) 4 3 8	
恵	愛 美	愛 見	愛 久	愛	愛 寸	愛 見	愛	愛	
恵得吾念妹者 (柿本人麿歌集)	言愛美	浜清浦愛見 (田辺福磨歌集)	愛久志我可多良倍婆 (山上憶良か)	愛常吾念情 (大伴坂上郎女)	愛寸事尽手四 (大伴坂上郎女)	君乎愛見 (大伴百代)	出去之愛夫者 (笠金村)	愛人之纏而師 (大伴旅人)	
ウツクシトワガ モフイモハ	コトウツクシミ	ハマキヨクウラ ウルハシミ	ウツクシクシガ カタラヘバ	ウルハシト (ウツクシト)ワ ガモフココロ	ウツクシキコト ツクシテヨ	キミヲ ウツクシミ	ウツクシツマハ	ウツクシキ ヒトノ	日本古典文学大系
私が可愛いと思う妹は	愛の言葉を うれしいと思つて	浜の景色が清く浦の風 景が立派なので	可愛らしく物を言う ので	あなたの立派さに引き つけられる私の心は	心のこもつた優しい 言葉をありつたけ言っ て下さい	君をなつかしく親しく 感じて	出かけて行つた私の いとしい夫は	いとしい人が枕にした	
ウツクシトワガ モフイモハ	コトウルハシミ	ハマキヨミウラ ナツカシミ(ウ ラウツクシミ)	ウツクシクシガ カタラヘバ	ウルハシトワガ オモフココロ	ウルハシキコト ツクシテヨ	キミヲ ウルハシミ	ウツクシツマハ	ウツクシキ ヒトノ	万葉集私注
可愛いと吾が思ふ妹は	言葉が可愛らしいので	浜が清く海がなつかし いので	可愛らしく彼が話すか ら	君を愛らしいと吾が思 ふ心は	愛情のこもつた言葉を 十分かけて下さい	君を大切に思つて	出て行かれた愛すべき 夫は	吾がめでいづくしむ人 の枕とした	
ウルハシトワガ モフイモハ	コトウルハシミ	ハマキヨミウラ ウルハシミ	ウツクシクシガ カタラヘバ	ウルハシトワガ モフココロ	ウルハシキコト ツクシテヨ	キミヲウルハシ ミ	ウルハシツマハ	ウルハシキヒト ノ	万葉集注釈
可愛いと自分が思ふあ の子は	御言葉に心惹かれて	浜が清く浦が美しくて	可愛くもそれが申すの で	お慕はしいと私が思ひ ます心は	せめてやさしいお言葉 をぞんぶんに聞かせて て下さい	あなたを大事に思つて (なつかしく思つて)	出て行かれたわが愛す する夫は	いとしい人が枕にした	

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
(19) 4 2 3 6	(13) 3 3 4 6	(13) 3 3 0 3	(13) 3 2 7 6	(12) 3 1 4 9	(12) 2 9 1 4	(12) 2 8 4 3	(11) 2 5 7 8	(11) 2 5 5 8	(11) 2 4 2 0
愛	愛	愛	愛	愛 美	愛	愛	愛	愛	愛
(遊行女婦蒲生伝誦) 愛吾妻離流	愛十羽能松原	汝恋愛妻者	浪雲乃愛妻跡	愛美君爾副而	愛等念吾妹乎	愛我念妹	愛君之手枕	愛等思篇来師	愛妹隔有鴨
ウツクシキワガ ツマサカル	ウルハシキトバ ノマツバラ	ナガコフルウツ クシツマハ	ナミクモノウツ クシツマト	ウツクシミキミ ニタグヒテ	ウツクシトオモ フワギモヲ	ウツクシミワガ モフイモ	ウツクシキキミ ガタマクラ	ウツクシトオモ ヘリケラシ	ウツクシイモハ ヘタチタルカモ
可愛いわが妻が遠くへ 行ってしまった	松原 立派な壮麗な十羽の	お前が恋しく思ってい るいとしい人は	波雲のように可愛い妻 と	いとしく思っておなた にお任せして	かわいいと思う妹を	かわいいと私の思う妹	枕にしたいとしいあな たの手が	妻が私を恋しく可愛い いと思っているらしい	かはい妹は遠く離れ ていることだ
ウツクシキワガ ツマサカル	ウツクシキトバ ノマツバラ	ナガコフルウツ クシツマハ	ナミクモノウツ クシツマト	ウルハシミキミ ニタグヒテ	ウツクシトオモ フワギモヲ	ウツクシトワガ オモフイモ	ウツクシキキミ ガタマクラ	ウツクシトオモ ヘリケラシ	ウツクシイモハ ヘナリタルカモ
可愛い吾が妻が離れて ゆく	愛すべき鳥羽の松原	お前の恋しがる可愛い つまは	ナミクモノ(枕詞)棚引 いた布雲のように美し い可愛い妻と	可愛く思われるので君 と一緒に	可愛いと思ふ吾妹を	可愛いと吾が思ふ妹	愛しき君が手枕	可愛いと思つたと見 える	可愛い妹はへだたつて あることかな
ウツクシキワガ ツマサカル	ウルハシキトバ ノマツバラ	ナガコフルウル ハシツマハ	ナミクモノウル ハシツマト	ウルハシミキミ ニタグヒテ	ウルハシトオモ フワギモヲ	ウルハシトワガ モフイモ	ウルハシキキミ ガタマクラ	ウルハシトオモ ヘリケラシ	ウルハシイモハ ヘナリタルカモ
可愛い私の妻は離れて いったのか	愛すべき十羽の松原よ	お前さんが恋ひ慕って る可愛い夫君は	ナミクモノ(枕詞) 可愛い妻と	いとほしさにあなたに ついて	可愛いと思ふあの子を	可愛いと私が思ふあ の子を	いとしい君の手枕	私をいとしいと思つて いるようだ	可愛いあの方はへだた つてのことよ

『大系本』は「うつくし」を情愛の意とし「うるはし」を麗美の意として歌の意味内容によってわけ、「注釈」は、「うるはし」「うつくし」両方共に上代では「愛」の漢字の意味がこもっているとし、いずれによんでもいいとしながら、萬葉集の仮名がきの多い「うるはし」に全部の訓をそろえた（例外として一首、6番の歌は憶良に仮名がきのウツクシがあるというのでウツクシクとよませた）。『大系本』は、情愛の意のあるものを全部（意味の上から）ウツクシと訓じ、表2の5、7、18の三首のみをウルハシと訓じた。その三首の中、7と18の歌は風景につく場合であるが、「うつくし」は人間以外を形容しないかというところ、^(註五)「宇都久志伎 乎米乃佐々波爾 阿羅礼左理 播磨風土記賀毛郡」の例もあり、7と18を『私注』『注釈』のように「愛すべき」と訳し「なつかしいので」と解しても差支えないわけである。又、5の場合には、『私注』『注釈』ともに情愛の意ととっている。以上で、わかるように、よみの上のみならず意味の上から言っても、私は全部にわたって、「愛」の文字を「うつくし」と訓むことの適切であるを思うのである。念のため、5、7、18の歌を再考すれば、

愛常 吾念情 速河之 雖塞々友 猶哉将崩

愛しとわが思ふ心速河の塞きに塞くともなほや崩えなむ^{卷四}
大伴坂上郎女 5

「愛常」を大系本でウルハシトとよませて、「あなたの立派さに引きつけられて」と解しているが、大変無理な解釈で、「愛」には、「恋する」「慕ふ」(『大漢和辞典』)の意があり、この一首も、「あなたを恋い慕う私の心は、速い川の水を塞きとめることが出来ないように、いくら塞いても崩れてしまうことである

う。」と訳す方がむしろ自然である。

濱清 浦愛見 神世自 千船湊 大和太乃濱

濱清く浦愛み神代より千船の泊つる大和太乃濱^{卷六}
濱清く浦愛み神代より千船の泊つる大和太乃濱^{卷六} 7

浜清く、というから、浦は美しいといいたい所で、『注釈』は「愛」の文字に愛の意を強調しておきながらここは「浜が清く、浦が美しく」と訳している。『私注』(土屋文明)は歌人の感覚で、ウラウツクシのよみを肯定しながらも、ウラナツカシミと訓まして「浜が清く海がなつかしいので」と訳している。そんな無理をしなくとも、「愛」の文字には、「めでる」「このむ」の意があり、『字彙』に「愛、好楽也」(大漢和辞典)とあるによって、一首は、「浜は清らかであり、浦は又愛すべく好ましいので」と訳した方が、前の反歌「まそ鏡敏馬の浦」^{卷六}や長歌の「五船の泊つる泊と」^{卷六}「夕波に玉藻は来寄る」^{卷六}等古代人の生活のおう言葉との照合を考えても、「浦愛美」は単に風景の美を賞美したのではないことは明らかである。「濱清く」で風景の美を言い「浦愛み」で、浦への愛恋の情をのべたとする方が優れていると思う。長歌の「往き還り見れども飽かず」などにも、そうした思いが感じられる。18の「見欲しきは雲居に見ゆる愛しき十羽の松原」^{卷十三}は、全釈で「十羽の松原は、妻を葬ったところか」と言っている如く、いとしい妻の忘れ形見の地名でもあろうから、「愛しき」は「慕わしくなつかしい」の意ととるべきである。(大漢和辞典に「皇疏」愛、慕也)とある。) なお、風景と「愛」との結びつきについては、16番の歌がある。

百不足 山田道乎 浪雲乃 愛妻跡 不語 別之来者卷十三三二七六

16 百足らず山田の道を波雲の愛し妻と語らず別れし来れば

大系本は、7、18の風景につく二首をウルハシと訓んで美の意味にとりながら、此の歌に關しては「波雲の—波のような雲の愛らしい感じによる形容か。枕詞か。」と言ひ「愛妻」をウツクシツマと訓んで「いとしい妻」の意としている。つまり大系本も、ここでは風景につくウツクシを認めているのである。注釈は例のごとくウルハシと訓みながら、「ナミグモノ（枕詞）可愛い妻」とし、文明は、「浪雲乃」を「並雲の」とし、視覚的に美の対象としながら、「愛妻」を愛の意にとり「棚引いた布雲のように美しい可愛い妻」と文学的自由である。

4、6、8は言葉との関連でウツクシが用いられている。

恋々而 相有時谷 愛寸 事盡手四 長常念者卷四六六一 大伴坂

上郎女 4

恋ひ恋ひて逢へる時だに愛しき言盡してよ長くと思はば

父母毛 表者奈佐我利 三枝之 中爾乎禰牟登 愛久 志我

可多良倍婆卷五九〇四 6

父母も 上は勿下り 三枝の 中にを寝むと 愛しく 其が

語らへば

吾背子之 言愛美 出去者 裳引將知 雪勿零卷十三三四 8

わが背子が言うつくしみ出で行かば裳引しるけむ雪な降りそ

ね
4は「恋いしい思いに耐えてお逢いする事の出来た時だけでも、愛情のこもった優しい言葉の限りをつくして下さい。長く仲をたもとうとお思いならば」とでも訳すところ、女性の甘美な口

吻の感じられる一首である。意味は同様にとりながら、私注も注釈もウルハシキと訓んである。6は、萬葉集の編者も「山上の操に似たるを以ちて」と言っている様に想も調も憶良的である。題詞に「恋ニ男子名古日一歌」とあって、愛児を失った父親の歌である。「お父さんもお母さんも、私のそばを離れないで。私は二人の真中に寝るんだ」と可愛らしく、物を言うので」と大系本が訳す様に、「愛久」は、愛児の言葉の形容である。父性愛は憶良の独壇場で、愛児の言葉の愛らしさをとらえたのは流石である。童の愛らしさをいうウツクシサは、やがて源氏の、源氏が童女の紫の上の微笑の愛らしさを「何心なく、うち笑みなどして居給へるが、いと、うつくしきに、我が御身も、うち笑まれて見給ふ。」（源氏若紫の巻）（何心なく笑っていらっしやるのがたいそうお可愛らしいので、君も自然とほほ笑まれながらお眺めになる。）（崎源氏）と表現しているが、その「うつくしき」の用例などにつながるものであろうか。8は「わが背子の愛の言葉に惹かれて、家を出て行ったら、私の裳裾を引きずった跡が雪の上にはつきりとわかるだろう。雪よ降らないでおくれ。」と雪に呼びかける形で、わが背子の愛の言葉に答えているので、これも一首甘美で、その情景も見える様で、民謡的な口吻がある。

ここで、ふりかえって考えてみるに、ウツクシの用例で、男性作、女性への歌が十首、女性作、男性への歌が九首で、ほぼ同数であるのに、ウルハシの用例に於ては、男性作、女性への歌が三首、男性作、男性への歌が六首（旅人の夢中間答歌を含む）である中、家持作三首で、しかも、女性作、男性への歌が一首もないのである。そして逆に、ウツクシの例では家持作は一首も見出すことは出来ないのである。しかし、家持作の歌の中には14の「

愛しと思ふ吾妹（愛等念吾妹）を夢に見て起きて探るに無きがさぶしさ」卷十二 二九一四を学んだと思われる。「夢の逢は苦しかりけり覚きてかき探れども手にも触れねば」卷四 七四一があり、12の「朝寝髪われは梳らじ愛しき君が手枕（愛君之手枕）触れてしものを」卷十一 二五七八を学んだと思われる。「朝寝髪掻きも梳らず出でて来し」卷十八 四一〇一がある。「朝寝髪」の用例は集中に此等の二首しかない。言葉に敏感な家持が「うつくし」の用例を一も残さず、やがて後説する「にほひ」の用例に於て、美女の多くを登場させ、容艶の詩人の名をほしきままにするのである。

III 「くはし」

先ず「くはし」の用例を左にあげよう。

- A、
イ、麗妹（くはしいも）卷十三 三三三〇
ロ、妙山叙（くはしき山ぞ）卷十三 三三三三
ハ、青柳之絲乃細紗（青柳の絲の細しさ）卷十 一八五一
B、
イ、宇良具波之布勢能美豆宇彌（うらぐはし布勢の海水）卷十七 三九九三
ロ、本辺者馬酔木花開末辺方椿花開浦妙山曾泣児守山（本辺は馬酔木花咲き末辺は椿花咲くうらぐはし山そ泣く児守る山）卷十三 三三三二
ハ、朝日奈須目細毛暮日奈須浦細毛（朝日なすまぐはしも夕日なすうらぐはしも）卷十三 三三三四
C、

- イ、賀都良賀気香具波之君（縵懸けかぐはし君）卷十八 四二二〇
ロ、多知波奈乃之多布久可是乃可具波志伎都久波能夜麻（橘の下吹く風の香ぐはしき筑波の山）卷二十二 四三七二
ハ、香細寸花橘乎（かぐはしき花橘を）卷十 一九六七
ニ、笑爾保布花橘乃香吉於夜能御言（咲きにはふ花橘の香ぐはしき親の御言）卷十九 四二六九
ホ、橘歌一首
香具播之美於枳豆可良之美（香細しみ置きて枯らしみ）卷十八 四二二一
ヘ、宇梅能波奈香乎加具波之美（梅の花香をかぐはしみ）卷二十 四五〇〇
D、
イ、名細之狭岑之島乃（名くはし狭岑の島の）卷二 二二〇
ロ、名細吉野乃山者（名くはし吉野の山は）卷二 五二
ハ、名細寸稻見乃海之（名くはしき稻見の海の）卷三 三〇三
E、
イ、麻具波思兒呂（ま麗し兒ろ）卷十四 三四二四
ロ、大宮都可倍朝日奈須目細毛（大宮仕へ朝日なすまぐはしも）卷十三 三三三四
ハ、己許乎之毛間細美香毛（此をしもまぐはしみかも）卷十三 三三三四
F
イ、花細葦垣越爾直一目相視之兒故（花ぐはし葦垣越しにただ一目相見し兒ゆゑ）卷十一 二五六五
以上で萬葉集の用例を尽したことになる。「くはし」に当る麗・妙・細等によって、その意味を察することが出来るが、佐佐木信綱の萬葉集事典の語意を列挙しよう。
くはし（形）麗美麗である。精妙である。
うらぐはし（形）麗心持よい。愛らしい。憂きことがない。

「うら」は心の意。「くはし」は美妙。

かぐはし（形）麴香がよい。かんばしい。美しい。愛らしい。

なぐはし（形）麴名の立派な。「くはし」は精妙の意。名の美しい意。

まぐはし（形）麴美しい。うるはしい。「ま」は目、「くはし」は精妙の意。

はなぐはし（枕）葦。麴花が美しいの意。

以上で大体その意味は明らかであるが、「古事記」に於て「久波志賣」（麗し女）〔上卷大國主神 沼河比売求婚の條〕とその歌謡に於て一か所を見るに過ぎないものが、萬葉では著しい用例を見ることが出来、Aにおいて、麗し妹、妙しき山の他に「青柳の絲の細しき」と自然の繊細微妙な美しさに観入し得ている。Bにおいても、布勢の湖水や馬酔木や椿の花の咲く山を「うらぐはし」と心に美しく感ずるのみならず、「朝日なすまぐはしも夕日なすうらぐはしも」は実にすばらしい感覚である。「まぐはし」「うらぐはし」は「目に沁みる花やかさ」「心に沁みる花やかさ」とでも訳す所か。語感のひびきがまた実にいい。Cの口、ハ、ニ、ホ、ヘは夫々橘や梅の香の微妙な感覚を賞美しているのであるが、イは家持作で題詞に「京に向はむ時に、貴人を見、及美人に相ひて、飲宴せむ日の為に云々」とあって、例の「みやびを」の文人氣質の一首である。「見まく欲り思ひしなへに縵懸けかぐはし君を相見つるかも」の「かぐはし君」は「うるはしみ吾が思ふ君」卷二十一 四四五と同じく、題詞の貴人のことである。美しく立派な君とでも訳すべきものである。Dは地名の美しさに関するもので、その意味と音感との美しさである。洗練された地名の詩的感覚はすばらし

い。Eは、折口信夫も

まぐはし（目細し）しく活用。注意をひく美しさに言ふ。きらびやかである。美しく見える。『ま』は目であらう。唯の接頭語「ま」ではなからう。此語、本集の中でも、比較的古い時代のものと見える。

と言っているが、「目」と「くはし」との結びつきは古代人の直観のすばらしさを語るもので、「下毛野美可母の山の小櫓のすま麗し児るは誰が笥か持たむ」卷十四 三四二四のかたわらに、「遠山に霞たなびきいや遠に妹が目見ずてわれ恋ひにけり」卷十一 二四二六や「妹が目の見まく欲しけく夕闇の木の葉隠れる月待つ如し」卷十一 二六六六を置いて観賞することも出来る。更に言えば「大船を荒海に漕ぎ出彌船たけわが見し児らが目見は著しも」卷七 二六六（大船を荒海に漕ぎ出して、いよいよ漕いで行くけれど、私が逢ったあの子の目もとの様子、がますます鮮やかに眼前に見えてくる。）で、女の美しい目にとりつかれてしまつてどうしようもない愛情をふり払おうと、荒海にいよいよ乗り出すが、思いとは反していよいよ、あの子の美しい目が鮮明に浮かんで来てどうしようもない、というので、女の目の美しさが此の一首に躍如としている。Fの「花細」は「葦」にかかる枕詞であるが、「花ぐはし葦垣越しにただ一目相見し児ゆる千遍嘆きつ」と一首の中に入ると、不思議な効果をもたらすものである。「花細」は萬葉集に一か所しか見えない言葉であるが、「花」と「くはし」との造語はすばらしい。華麗なイメージと繊細なイメージとの美しい調和がなされていて、調べも美しい言葉である。

IV 「にのほ」と「さにつらふ」

「にのほ」について、折口信夫は「（注）にのほ」は「丹頬」で「赤い頬」であり、『萬葉人は紅顔の人を愛してゐる。血色のすぐれた人を美人としてゐるので、「あから嬢子」と言ひ云々』とのべ、大言海は『にのほ 丹穂 赤き頬。頬紅ヲツケタルナリ』といい、両者は、「丹の頬」ということでは共通していて、その頬の赤味さした美しさが、自然の血色のよさであるか、頬紅であるかに相違点がある。恐らく萬葉ではその両者が存在したであろう。頬紅はホホベニで、紅花の花弁をしぼって製煉したベニ（ヘニともいう）で、和名抄に『容飾具「輕粉、閉邇、輕、赤也、染（粉）使レ赤、所ニ以着レ頬也』、名義抄「輕、ヘニ、輕粉ヘニ」などとあるのがそれである。唯、ここで折口氏のいう「あから嬢子」の用例は萬葉にはなく、恐らくは、古事記（中巻） 応神天皇、髮長比売の条にある「阿迦良袁登賣」（赤ら嬢子）を指すものであろう。

「さにつらふ」は『大系本』の註に「枕詞」で、「赤い頬をした」の意であり「サは接頭語―丹は赤色。ツラは頬。フは動詞化する接尾語」とあるによって明らかである。又、「につらふ」とも言った。これらの言葉が修飾している語をあげると次の様になる。

さにづらふ（枕）
 君（一六）三八二一（一六）三八三三（一三）三三七六 紐（赤紐）（二二）三一
 四四（四）五〇九 妹（一〇）一九二一 大王（三）四二〇 黄葉（六）一〇五
 三 色（二）二五二三
 につらふ（枕）

君（二）二五二二 妹（一〇）一九八六
 にのほ

（に）黄色（一三）三三六六 （なす）面（五）八〇四 （の）面
 （一〇）二〇〇三

「妹」と「君」を修飾した場合の用例をあげると

- 1 わが恋ふるにのほの面（丹穂面）今夕もか天の河原に石枕（まく）二〇〇三
 - 2、われのみや斯く恋すらむ杜若丹つらふ妹（丹頬合妹）は如何にかあるらむ（まく）一九八六
 - 3、さにつらふ妹（左丹頬経妹）をおもふと霞立つ春日も暗（まく）に恋ひ渡るかも（まく）一九二一
 - 4、わが命は惜しくもあらずさ丹つらふ君（散追良布君）に依りてそ長く欲（まく）りする（まく）三六三
 - 5、杜若丹つらふ君（丹頬経君）をゆくりなく思ひ出でつつ嘆きつるかも（まく）二五二二
- 1、2、3は男性から女性へであり、4、5は女性から男性へである。もつとも、1は七夕の歌で、牽牛星から織女星へである。「わが恋ふる丹の頬の面」は美しい表現である。2の「杜若丹つらふ妹」5の「かきつばた丹つらふ君」双方とも恋の嘆きを歌っている様である。折口氏は「かきつばた 枕。にはへる妹。君。燕子花の如く艶（ニホ）ひやかなる妹（君）と、その艶麗なのを形容したのである。」といわれたのは、5の「につらふ（丹頬経）」を「にはへる」とよまれたのである。4の「君に依りてそ長く欲（まく）りする」は「あなた故に長く生きたいと思う」という意。「さ丹つらふ」がやはり利（まく）いている。3の「霞立つ春日も暗（まく）に恋ひ渡るかも」は「霞の立つ長い春日も暗く思われるほど恋いつづけてい

所が、これらの自然の色相の美は、人間の容姿の美と相映発して、「にほひ」の美を形成する所に、新しい美を創造しているの

朝日影	真砂 <small>マコ</small>	真土山	馬酔木	藤	卯の花	女郎花	紫草	桃の花	山吹	(くれない (へニバナ))	梅	埴生 (黄土)	桜	橘	榛
紅	白か	白	白	紫	白	黄	紫	紅	黄	紅	白	黄	淡紅	白	榛の実 白と黒の模様染
495 (1)	1799 (1)	1192 (1)	4512 (1)	4200 (1)	3978 (1)	2115 (1)	20 (1)	4139 4192 (2)	2786 4185 (2)	1297 2828 3877 (3)	4287 (白梅) 1859 (2)	69 932 1002 (3)	1429 1872 3704 (3)	3916 3918 3920 4169 (4)	57 1965 3801 2791 (4)

で、その美の創造者の中、最高の榮譽をになっているのが、ほかならぬ大伴家持なのである。「にほひ」の美に貢献している萬葉人は、大伴家持に限るわけではないが、家持をその頂点とした、極めて鋭角的な三角形を形成していると見なければならぬ。以下用例をあげながら説明しよう。

大伴家持を中心とした「にほひ」の美は、一つには、自然の色相の美を發達させ、一つには容色の美を自覺的にした。花や紅葉の形と色を愛した萬葉人が染色法の發達と共に次第に色感を鋭敏にし、自然への愛が、色彩の美への自覺をうながした。「にほひ」は萬葉人の「愛」から「美」への自覺的な意識を、作品に結晶する際に、萬葉人の好んで用いたもので、萬葉の「美」を象徴するにふさわしい美的用語となったのである。

新撰字鏡に「蟬媛 美麗之貌 爾保不 又字留和志 又於曾與加爾」とある「蟬媛」も美女に関する文字で、中国における美女の美貌をあらわす「蟬媛」が、日本語の「にほふ」にあたることを示している。私が先にのべたIの「美女」の所で引用した「見渡せば向つ峰の上の花にほひ照りて立てるは愛しい誰が妻」も、題詞の「在二館門一見二江南美女二」も、難波堀江の南を中国流に、江南と記し、中国風の美女という表現が、日本流に「にほひ」の語を中心に構成されているのである。此の一首の構成は「見渡せば向つ峰の上の花にほひ」と「にほひ照りて立てるは愛しい誰が妻」とに分け、「花がにおうように、照りにおうて立っているのは」という様に、「にほふ」が両句にまたがって、上句が下句の比喩になり、又序の様な形で両者を結ぶことになる。又此処で大切なのは、この花の様に美しい女性は、決して家持の愛の対象ではなく、美の対象であるということである。即ちこの女

性は家持自身の愛妻ではなく、「愛しき誰が妻」で、美女の絵を見るように、第三者として、外から美女を観照している立場に立っているのである。「花にほひ」と、花と「にほひ」を結びつけたのは、家持の創作らしく、他にもう一首家持作がある。その一首に移ろう。

秋野には今こそ行かめ物部の男女の花にほひ見に（波奈爾
保比見爾）卷二十 大伴家持
四三七

「物部の男女」は朝廷に仕える大宮人の文武の官で、その容姿が、秋野の花に相映発して輝くのを見にゆこう、というので、美男美女即ち「みやびを」と「みやびめ」の容姿や衣装を美の対象として観照しようというのである。その美しさは「花にほひ」の語で、いみじくも表現されている。此の「花にほひ」の美は、奈良の都に時めいた美しさであって、かの有名な「あをによし寧楽の京師は咲く花の薫ふがごとく（咲花乃薫如）今盛りなり」卷三 小野老
三三八も、やはり大宮人の「花にほひ」の世界であったのである。

「にほひ」の美は、その基調をなすものが、色彩の美しさであるが、その色相の美が、自然の美と人間の美と相映発するとき、その「にほひ」の美が極度に高揚されるものと思う。

黒牛の海紅にほふ（紅丹穂経）ももしきの大宮人し漁すらし
卷七 藤原房前か
二二八 1

宮人の袖付衣秋萩にはほひよろしき（仁保比与呂之伎）高
卷二十 大伴家持
四三二五 2

1の「黒牛の海」は固有名詞で、その色相は碧である。大宮人の漁であるから遊樂の気分のみなざるもので、女官等の紅衣が碧海に相映発して、気色ほのけき美しさが、かもし出されたもので

あろう。碧海に紅衣の映える美しさが「にほひ」である。

平安朝では「本朝文粹」の、菅三品（菅原文時）の詩に、「花垂映而水下照」（花は映を垂れて水下に照り）「濃艶臨兮波変レ色」（濃艶臨みて波色を変ふ）とあるが、前者は花の枝の垂れるさまを映を垂れといい、後者は花の艶麗な色を濃艶の二字であらわし、共に花と水（又は波）との相映発する美しさをとらえている。やはり「にほひ」の世界である。

2の袖付衣は長袖の衣である。その衣装の色と萩の花の色とが映発して、高円の宮の内外が花やいでいる有様が「にほひよろしき」である。更に衣と染料との関係について、次の様な歌がある。

紅の濃染の衣を下に着ば人の見らくにほひ出でむかも（仁
寶比将出鴨）卷十一
二八二八 3

紅に衣染めまく欲しけども着てにほはばか人の知るべき
（着丹穂哉 人可知）卷七
二二九七 4

紅に染めてし衣雨降りてにほひはずとも移ろはめやも（爾
保比波雖為 移波米也毛）卷十六
三八七七 5

「紅の濃染の衣」（紅之深染乃衣）「紅に衣染めまく」（紅衣染雖欲）「紅に染めてし衣」（紅爾染而之衣）は、紅花即ちベニバナで染めた衣である。3はその濃染の衣を下に着たなら人の見る目に明らかに、表面にその紅の色が映えるであろう。というので、濃い紅染の衣を着た美女が、その色衣を下着にきた美しさを「にほひ出でむ」といったのである。まことに艶麗な美の表出である。

4、私は衣を紅染にしたいが、その紅染の衣を着て著しく目立って映えたなら人が知るであろう、というので、他人を意識して

歌っているのである。美は見られるものの立場に立って人を意識するところから始まるのではなからうか。5は、紅染の衣は雨にぬれて色が美しく映えることはあっても、色があせるといふことがあるうか、ない。というので、雨の日の紅染衣の美を「にはひ」で現わしている。

「にはひ」の例は東歌に一首ある。

筑紫なるにほふ兒ゆゑに（爾抱布兒由惠爾）陸奥の可刀利
少女の結びし紐解く三四二七 6

「契合った男女が再び逢ふまでの貞操の象徴として互に衣の紐を結び交」しあったのが当時の風習で、ここでは可刀利少女と契り合つて結んだその紐を、艶麗な筑紫少女の美しさ故に解く、というので、此の歌には愛と美との対比がある。

紫草のにはへる妹（爾保徹類妹）を憎くあらば人妻ゆゑにわ
れ恋ひめやも二大海人皇子 7

山吹のにはへる妹（爾保徹流妹）が朱華色の赤裳の姿夢に見
えつ卷十一 8

7の紫草は、その根が太く長くて、紫の色素を含み、古代から染色に用いられた。この歌の場合「紫のにはへる妹」は紫草でなく色そのものを指しており、染色に用いる紫の色の様に艶麗な美しさの妹ということであろう。人妻であるということの道徳性を越えて、その容艶な美しさ故に恋しいと言う。強い美意識が働いているものと思う。8の、「朱華色は即ち朱色で、「はねず色の赤裳の姿」が美の対象で、その美へのあこがれゆゑに夢に見えてくるというのである。

雄神川紅にほふ（久礼奈為爾保布）少女らし葦附採ると瀬に
立たすらし卷十七 大伴家持 9

春の苑紅にほふ（紅爾保布）桃の花下照る道に出で立つ少女
卷十九 大伴家持 10

ともに家持が国守として、越中の国府に在任していた折のもので、一首目は家持が春の出挙に国内を巡行した折のもので、9の「紅にほふ」は、雄神川の清流に、少女の紅の赤裳の裾が映えているのであろう。この少女は美しい少女として見られる少女であつて、愛の対象としての少女ではない。家持は葦附を取る少女を傍観して過ぎてゆくのである。

私は先に10の「春の苑」の歌について「家持の女人像が、支那文学乃至支那絵画の構図をとり入れて濃艶な美を開拓し得たといえよう」と言った。窪田空穂氏は「居間から見て花のように美しいと感じて、妻を愛でた心である。」（『万葉集詳釈』）といわれた、しかし、此の歌は題詞に「天平勝宝二年三月一日の暮、春の苑の桃李の花を眺騰て作る歌」とあつて、桃樹の下に美人を立てたしめた作意的構図なのである。この歌は春の苑、紅にほふ桃の花、下照る道に出で立つ少女、と三つの世界が名詞止で区切られている。そして此の三つの世界は夫々に一つの独立した世界を持っている。先ず「春の苑」が展開される。次に「紅にほふ桃の花」であり、最後に「下照る道に出で立つ少女」である。此の三つの世界が、あたかも連歌における「にはひ」「ひびき」のように、相映発する。構成そのものが「にはひ」の世界である。「桃の花」をよんだ歌は集中二首しかないが、共に家持作で、他の一首は「桃の花 紅色に にはひたる 面輪のうちに 青柳の

細き眉根を 咲みまがり 朝影見つつ 少女らが 手に取り持てる 真澄鏡 二上山に云々」卷十九 大伴家持 四一九二の長歌である。題詞が「霍公鳥と藤の花とを詠む一首」とあって、真澄鏡までが二上山の序で、桃の花の紅色が少女の顔面に相映発するその美しい面輪の少女であり、「眉根」は眉、「朝影」は朝、鏡に映る面影であり、「咲みまがり」は、眉曲げて微笑するであり、鏡をみるこの美女のイメージも、やはり家持の心に画いていたフィクションの世界であったことが知られるのである。そう言えば、「江南の美女」の歌「見渡せば向つ峰の上の花にほひ照りて立てるは愛しき誰が妻」も、虚構のにおいがなくてもない。共に、美女立像の図であり、題詞に「江南の美女」などと中国風に言ったことを考えてみても、家持の美女の意識の中に、日本の美女と中国の美女とが重なり、中国の美女の比重が大をなすに従って、フィクションの度合も大きくなって行ったのではなからうか。最後に、もう一首あげる。

石竹花が見るごとに少女らが笑まひのほひ（惠末比能爾 保比）思ほゆるかも卷十八 家持 四二二四 11

此の歌は「庭中の花を詠めて作る歌」卷十八 四二二三の長歌の反歌である。長歌には「石竹花が その花妻に さ百合花 後も逢はむ」と、都の妻を歌っていながら、反歌になると、一転して「少女ら（平登女良）」と複類になり、「笑まひのほひ」という艶麗な美女を転出させるのである。これはどういうことであろうか。都の妻を遠く離れてひなる越中に住んでいた家持には、石竹花や百合の花を見ている中に、都の妻は次第にまぼろしの「花妻」となり、その「花妻」は多くの宮女等のイメージの中に解消して、少女の群像となり、美的官能のいぶきすら持った「笑

まひのほひ」の少女となったのであろうか。

以上、家持が至り得た「にほひ」の美に言及したが、それは家持の美の系譜であって、家持の愛の系譜は「愛し」「悲し」の追求に於て、個的な深みと細みある歌調を完成して行ったので、それについては、万葉における愛の系譜として、新たに稿を起したいと思う。

むすび

「阿那通夜志愛衰登賣衰」「阿那通夜志愛衰登古衰」と、二神、相聞の愛の言葉に始った日本の神話は、或時は「愛しき我が那邇妹の命」（愛我那邇妹命）「愛しき我が那勢の命」（愛我那勢命）と、愛の呼びかけをくりかえしながら、伊邪那岐、伊邪那美二神の国生みの業を完成して行った。その国々の名に「伊豫国は愛比賣と謂ひ、讃岐国は飯依比古と謂ひ」（伊豫國謂二愛上比賣一、讃岐國謂二飯依比古一）の如く、男女の性格が賦与され、「吉備児島を生みき」（生二吉備児嶋一）の如く、児の性格が与えられた。国生みの後に神生みの業があり、那伎の神の「襖ぎ祓ひ」（襖祓）の清めの業から尊貴な神々が生れた。伊豆能賣神という女神で光の神も生れた。「記」「紀」に於ては、愛の言葉に男女の差はなく、その容姿の美を讃える場合にも男女の差別はなかった。

『古事記』の用例に「遇麗美人」上巻「名勢夜陀多良比賣、其容姿麗美」中巻「活玉依毘賣、其容姿端正」中巻「名兄比賣、弟比賣二嬢子、其容姿麗美」中巻「河辺有ニ洗衣童女。其容姿甚麗」下巻「有童女。其形姿美麗」

(六)

鴻巣盛廣氏は「萬葉集全釋」で、卷五の歌の註に「一云、爾能保奈酒ナナ丹の秀如ナナ。ニノホは赤い色の秀で美しきをいふ。顔の色の赤きに用ゐるである。祝詞に「赤丹の穂にきこしめす」とあるのも同じである。」といわれている。祝詞の用例は、祈年祭にある「赤丹穂爾聞食」である。
折口信夫全集第五卷(口譯萬葉集)の卷十一の二五二に「杜若かまづばた匂へる君を」とよまし、第四卷卷十一九八六に「杜若かまづばた匂へるとよましている。「丹類経」二五二と「丹類合」一九八六との差である。

(七)

上村六郎「萬葉染色の研究」『萬葉集講座』第二卷頁三三二

(八)

尾崎元春「服飾」同書頁三〇八

(九)

梶井重雄「北陸萬葉短歌の鑑賞」『和歌の歴史』(桜楓社)頁二六一

(一〇)

山本健吉著『大伴家持』(筑摩書房)

(一一)

家持の「美的官能」に関しては、前出の所論梶井重雄「北陸萬葉短歌の鑑賞」における「覚官の美」を参照されたい。

(一二)